１月 30 日（日）【グリーンツアー】渡良瀬エコビレッジ
渡良瀬遊水池見学＆オーガニックコットンセミナー

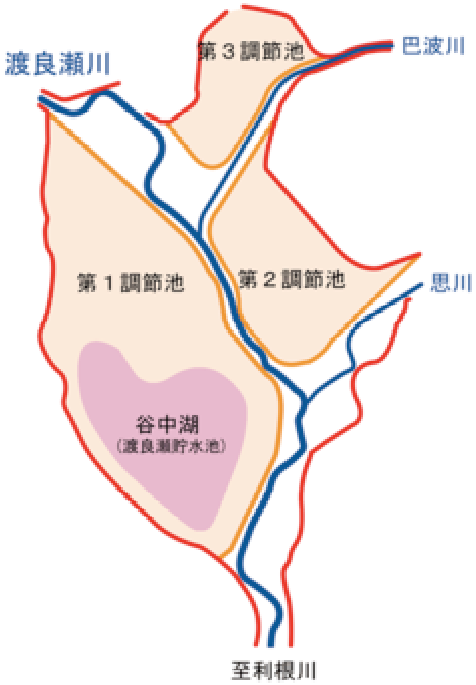
ツアーディレクター　澤田佳子

渡良瀬エコビレジの代表、町田武士さんが高校生の時に衝撃を受け、循環型の暮らしを目指すようになったのが、地元渡良瀬遊水池を舞台に起こった「足尾銅山鉱毒事件」。今回は、そんな町田さんのルーツをたどりつつ、オーガニックな暮らしの大切さに触れ、和綿栽培の現状を知るスタディツアーを実施しました。

渡良瀬エコビレッジのある栃木県栃木市藤岡町は、かつて栃木県上都賀郡足尾町（現在日光市足尾地区）にあった足尾銅山の鉱毒事件で大きな被害を受けました。江戸時代に開山した足尾銅山は明治の富国強兵で一気に生産量が増え、銅山から流れ出る重金属が渡良瀬川の魚を殺して生態系を壊し始めていました。またそれだけでなく、渡良瀬川の氾濫とともに周辺地域へ重金属を含んだ水が流れ出し、被害が拡大していったのです。有名な田中正造の明治天皇への直訴は、この問題を提言しようとしたものでした。

田中正造の訴えは受け入れられず、1905 年、政府は渡良瀬川に思川、巴波川（うずまがわ）が合流する湿地帯にある集落、谷中村全域を堤で囲い遊水池をつくる計画を発表しました。これによって洪水を防ぎ、公害の沈静化を図ることにしたのです。もうひとつの意図として、反対運動の中心的な存在だった谷中村の力を弱める狙いもあったといわれています。

衛星写真



詳細地図

wikipedia より

1907 年には、残っていた住民達の強制移住が行われます。しかし正造は谷中村に移り住み、住民と一緒に最後まで戦いました。正造は 1913 年になくなりましたが、数人の村民はその後もここに住みつづけ、1917 年２月頃までここで暮らしていたそうです。彼らは鉱毒に侵された土地での自給自足の貧しい暮らしの中で、最後まで志を貫いたのでしょう。

写真は現在の渡良瀬川。遊水池建設に伴い流路が変えられています。

かつては船屋が並び、半農半漁の生活をしていたこの場所は、足尾銅山から流れ出る土砂で埋まり、本州一の葦原に姿を変え、鷹や鷲などの猛禽類が営巣する野鳥の住処になっています。 また、遮るものがないここからは、茨城県つくば市にある筑波山、栃木県日光市の男体山、東京とその向こうにある富士山など、三方の山がよく見えます。

集落跡も残されていました。こちらは旧役場跡。湿地の中に土を盛り高台がつくられています。